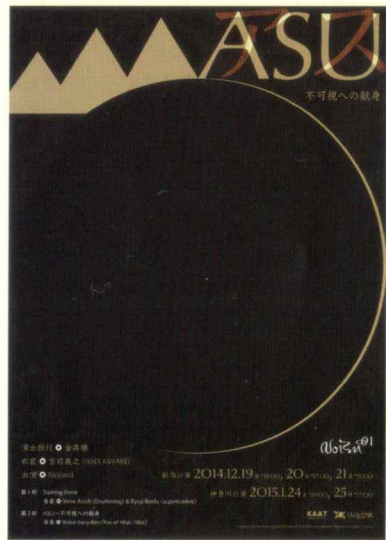




ASU～不可視への献身

演出振付：金森 穰
衣裳：宮前義之 (ISSEY MIYAKE)
出演：Noism1

第1部 Training Piece
音楽：Steve Reich〈Drumming〉
Ryoji Ikeda〈supercodex〉

第2部 ASU
音楽：Bolot Bairyshev
〈Kai of Altai/Alas〉
木工美術：近藤正樹

井関佐和子
亀井彩加
角田レオナルド仁
簡 麟懿
石原悠子
池ヶ谷奏
吉崎裕哉
梶田留以
岡本壮太
佐藤琢哉
上田尚弘 (準メンバー)

【新潟公演】
2014年12月19日、20日、21日
りゅーとぴあ 新潟市民芸術文化会館〈劇場〉

【神奈川公演】
2015年1月24日、25日
KAAT 神奈川芸術劇場〈ホール〉

特別寄稿 『ASU～不可視への献身』の衝撃

山野 博大 (舞踊評論家)

Noism1の横浜公演で金森穰の新作『ASU～不可視への献身』を見た。この作品は、昨年12月19日に本拠地のりゅーとぴあで初演したものだ。第1部が「Training Piece」、第2部が「ASU」という2部構成だった。

「Training Piece」は井関佐和子をはじめとする11人のダンサーが踊った。幕が開くと、全員が明るい舞台に等間隔で寝ている状態が見えた。ひとりひとりのダンサーが個々のシートに寝ているような、照明の効果があり、これはどこかのスタジオでのレッスンの風景のようだった。寝たままゆっくりと両腕を動かすところから、トレーニングが始まった。バレエのバー・レッスンは直立した肉体に対するトレーニングだが、ここではそれを寝たままの状態で行い、そこへさらに新しい要素を加えた。後半は白っぽい上着を脱いで、カラフルな衣装(ISSEY MIYAKE所属の宮前義之のデザイン)になり、フロア全体を使つてのトレーニングとなった。

ダンスのトレーニング・システムは、作品で使われるおおよその動きを予想した、そのダンス固有のテクニックの集大成であり、普通それは観客に見せない。しかし、ここではまずNoismダンスの種明かしが行われたかっこうだった。これと同様のことを、かつて伊藤道郎がやっていたことを思い出した。彼は『テン・ジェスチャー』という伊藤舞踊のエッセンスを作品化していて、それをダンサーのトレーニングに使うばかりか、しばしば観客にも披露した。

第2部の「ASU」は一転して暗い舞台だった。灯火を掲げたダンサー9人が登場した。黒を基調とした、個々別々の衣裳をまとい、前半のはなやいだ雰囲気と一線を画した。舞台奥には木材を加工して作った大きな樹木のようなもの(木工美術＝近藤正樹)が寝かされていた。舞台には、Bolot Bairyshevの「Kai of Altai/Alas」が鳴っていた。これはアルタイ共和国に伝わるカイ(喉歌)という種類の音楽だそうだが、私には太樟の三味線を伴奏に太夫が語る、日本の義太夫のようにも聞こえた。

しだいに明るくなった舞台で、9人のダンサーたちが動きはじめた。その動きは今まで見たNoismのもの、と大きく異なった。そこには今の時代の日常の人間関係から、歌舞伎や文楽などに残る義理人情の世界まで、いろいろなものが混ざり合っていたと、私は直感的に受け取った。日本では、20世紀初頭に西欧の動きを取り入れて「洋舞」とか、「現代舞踊」と称するものを生みだし、それを育ててきた。しかし「ASU」はそれらとはまったく異なる別の世界だった。

戦前からの石井漠、高田せい子、江口隆哉、檜健次ら日本の現代舞踊の始祖たちは、とぼしい海外からの情報を足掛かりとして、そこに日本古来の動きを加味して「日本の現代舞踊」を作った。それは敗戦を契機としてアメリカからもたらされたマーサ・グラーム、ホセ・リモン、マース・カニングハムらのアメリカン・スタイルのモダンダンスに一蹴されたかに見えた。しかしバレエやコンテンポラリー・ダンス、そして日本古来の舞台芸能などと協調しながら、この日本に今もしぶとく生き続けている。

舞台ではカイ(喉歌)の音が鳴り続け、近藤正樹の

樹木のオブジェが大地に立った。そこで宮前義之の、いかにも動きやすそうな衣裳をまとったダンサーたちが金森穰の創り出した動きに専念した。彼は今の時代の西欧のダンスを習得して帰国し、新潟でNoismを立ち上げた。そこで西欧のダンス・カンパニーと同様の公演の形態を日本の土地で実現させようと、創作にはげんだ。彼の目は世界へ(西欧へ)と向いていた。

しかしこんどの『ASU～不可視への献身』で、彼の目は別の方角を見ていた。とつじよ彼の中から「西欧ではないX」が噴出したのだ。現代の日本は、アジアに位置しながら西欧のものを生活の中に大量に取り入れ、アジアよりは欧米に近い日常を作り出している。昔から日本人は海の外からやってくるものに異常な関心を示し、いろいろなものをどんどん取り込んで「日本」を作ってきた。しかしいつも向こうのものをそのまま取り込むことはしなかった。たとえば、紀元前に北部インドで釈迦がはじめた仏教は6世紀頃に日本へ伝わったが、それから1500年が経てみると、すっかり日本化して、元のものとはだいぶ様子が違う。また政治、経済のシステムにしても、海外のものを取り入れたはずにもかかわらず向こうのものと同じと言えない状況であることは周知の事実だ。それと同じようなことがいろいろな分野で起こり、今の「日本」が出来上がっている。

かつて日本は、わずかな情報をもとに「洋舞」を作りだした。しかし世界の情報がリアルタイムに入ってくる現代にあつては、向こうのやり方をそのまま持ち込めば、それでよし。「日本らしさ」は、そこに自然に現われてくるものという考えが一般的となった。金森穰も、今まではこの「自然ににじみ出る日本らしさ」を作品の柱にしてきたと思う。それがこんどの『ASU～不可視への献身』で一変した。長い時間をかけて日本に蓄積した「動き」のニュアンスとでも言うべきものに焦点をあて、それそのものを作品化したのだ。

私はこれを見る直前に、国立劇場で四国の土佐に伝わる古神楽の舞台再現に立ち会っていた。そこでは日本芸能の古層が随所に姿をあらわした。それを見たのと同じ感覚を、直後に金森作品から受けるとは思ってもみなかった。彼は日本の歴史の古くからの蓄積物に手をつけてしまった。これ以後は「自然ににじみ出る日本らしさ」だけで作品を作れない時代となるだろう。とんでもないものを見てしまったという思いが心中に広がった。

(2015年1月24日、KAAT 神奈川芸術劇場 ホール)

山野 博大(やまのはくだい) 舞踊評論家

1936年(昭和11年)4月10日、東京生れ。1959年3月、慶応義塾大学法学部法律学科卒業。1957年より、新聞、雑誌等に、公演批評、作品解説等を書き、今日に至る。文化庁の文化審議会政策部会、同芸術祭、同芸術団体重点支援事業協力者会議、同人材育成支援事業協力者会議、日本芸術文化振興基金運営委員会等の委員を歴任。文化勲章、芸術選奨、朝日舞台芸術賞、橋秋子賞、股部智恵子賞、ニムラ舞踊賞等の選考、国内各地の舞踊コンクールの審査にあたる。舞踊学会、ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク、日本洋舞史研究会等に所属。日本洋舞史を舞踊家の証言で残す連続インタビュー企画《ダンス＝人間史》の聞き手をつとめる。《舞踊批評塾》主宰、インターネット舞踊批評専門誌「ダンス・タイムズ」代表。舞踊関係者による《まよい旬会》同人。2006年、永年の舞踊評論活動に対し、文化庁長官表彰を受ける。NoismサポーターズUnofficial会員。



『ASU』撮影：篠山紀信

もりだくさんの4ヶ月

2014年の冬から2015年春は、ちょっと嬉しい季節になった。それは、「月イチ」に近いペースでNoismと井関さんの舞台を見られたから。東京在住のファンにとっては、かなり珍しいことなのだ。

12月、雪のりゅーとぴあへ。「ASU～不可視への献身」は二部構成で、Noismの訓練法とその理論を作品化したという「Training Piece」から。白い衣装のダンサーたちが、白い床の上でリズムカルに体を動かす。毎朝、体も心もまっさらにして自分と向き合うのだろうか。あれはこの作品？あれはこのシーンで使われていた？と連想させる動きが随所にあられる。

後半は、カラフルな衣装に変わり、曲もテンポアップ。1人で、数人で、様々な組み合わせの踊りからは、「訓練」の印象が消え、個性が際立つ。客席へ向ける表情も豊かになり、見ている方も肩の力を抜いて楽しめた。Noismのダンサーには修行僧的な雰囲気があるけれど、皆さん踊ることが好きなよね、と当たり前のことを思ったり。

第二部「ASU」。暗がりの中、火をともした皿をかがけ、ダンサーたちが舞台の下から上がってくる。全員が、黒い鬘に、土と同化したような衣裳をまとい、誰が誰かすぐには判別できない。言葉はない。ダンスだから言葉を用いない、というのではなく、言葉が存在しない世界を思わせる。夜の森？洞窟の中？それとも地下？場所も時代もわからない。ただ、なまなましい人間たちのからだがあり、ともに息づき、ときに攻撃的にぶつかりあう。そして、金森さんがいつも意識しているという「死」の影が色濃く漂い、「宗教」や「信仰」として加工される前の、もっと荒削りな「祈り」に似た何かが満ちる。残るのは深淵の闇。

「ASU」で使われている「カイ」という音楽は「歌」なので、言葉を伴っているはずだが、理解することはできない。「音」として耳に響き、果てしないエンドレス感を伴う。「終わりがなければいい」という想像は、人を不安にさせる。

終演後は例によってぐったり。世間にもっとお手軽に味わえる感動(ノウナモノ?)があるのに、何故わざわざお金を払って疲れに来るのだろう？と

時々思うのだが、結局見ずにはいられない。ファンという名の中毒患者？

今回、自然と目が追ったのは、新加入の梶田さん。すらっとした姿が少しボーイッシュで、井関さんと絡む踊りに心をひかれた。今後の活躍に期待がつのる。

年が明け、1月24・25日に「ASU」の神奈川公演を続けて見たあと、頭の切り替えもそこそこに、30日の「青山バレエフェスティバル」へ。Noism副芸術監督兼中心ダンサーとして、常に集団を背負っている感のある井関さんが、「Under the marron tree」では1人の女性に戻る。前回見たのはおそらく10年前だが、印象は殆ど変わらない。大好きな作品なので、また出会えたらいいな、と思う。5年後も、10年後も、井関さんは変わらず踊ってくれる、きっと。是非、「nomad・ic project」のような、過去の金森作品を集めた公演もやってほしい。(金森さんや元Noismメンバーも踊る企画だったらなお嬉しい。)

余談になるが、「青山バレエフェスティバル」は、長年通いなれた青山劇場の最終公演だった。井関さんが出演しなければラストディに立ち会うことはなかったので、めぐりあわせに感謝している。

桜もほころんだ3月28日、NHKホールで「バレエの饗宴」。4団体しか出ないのに、Noismの「supernova」が15分って短すぎやしないか？と不満だったが、大間違い。長けりやいってモンではないのだ。

まず衣裳に驚く。井関さんは白、他のダンサーは黒の、網タイツのようなものを、顔から指先、足まで、全身に被っている。表情をうかがうことはできない。まるで白い彫刻と黒い影。不穏な空気がたちこめる。

井関さんにしのびより、激しく襲いかかるようだった影たちが、徐々に圧倒され、立場が逆転してゆく。やがて、影たちは舞台後方の白い幕の後ろに並び、ゆらゆらと揺れはじめる。その形は確かに人間だったのだが、次第に腕が枝のように変化し、体全体が樹木に見えてくる。さらに揺れると枝も幹もどんどん

細くなり、ついには、蒸発するように何もかもが消滅する。舞台前面に残っていた影(吉崎さん)も、床に臥して動かなくなる。静かに、もしかすると無意識に、強大な力で世界を支配する白い女神は、禍々しく美しい。

少しずつ明かりが落ち、井関さんもまた、ゆったりと動く黒い影に変容し、幕がおりる。斬新で、濃密な15分。休憩に入ってもしばらくは興奮がおさまらなかった。

約2週間後、「バレエの饗宴」がNHKで放送された。稽古風景や金森さん・井関さんのインタビューに喜びつつも、舞台中継自体は、正直なところ、うーん……という感じだった。生で見た印象と違うのである。現場では、ダンス作品の枠を超え、空間を巻き込んで「現象」と化すようなパワーに溢れていたのだが、画面を通して同じ体験はできない……Noismにとっては貴重な、生演奏の迫力にも欠ける……ワガママだとわかっているけれど……ぶつぶつ。常に「多くの人に見てもらいたい」と言っているのに、そのいい機会なのに、いざとなると文句をたれる始末で、我ながら呆れてしまう。

「バレエの饗宴」の公演と同じ日にBSで放送された三宅一生のドキュメンタリー番組でもNoismメンバーが踊っていたが、こちらは違和感なく、とても楽しめた。映像化を前提として作られているからだろう。地上波で全国放送してほしい。映像が情報伝達の有力なツールであることはまぎれもない事実なので、生の舞台との相乗効果が出るような形で活用を願っている。

もりだくさんで充実した4ヶ月だったが、中川さんの踊りを見られなかったことだけが、本当に残念。あの素敵なた姿が舞台上に帰ってくる日を心待ちにしています。

安藤貴映子(会員番号73)



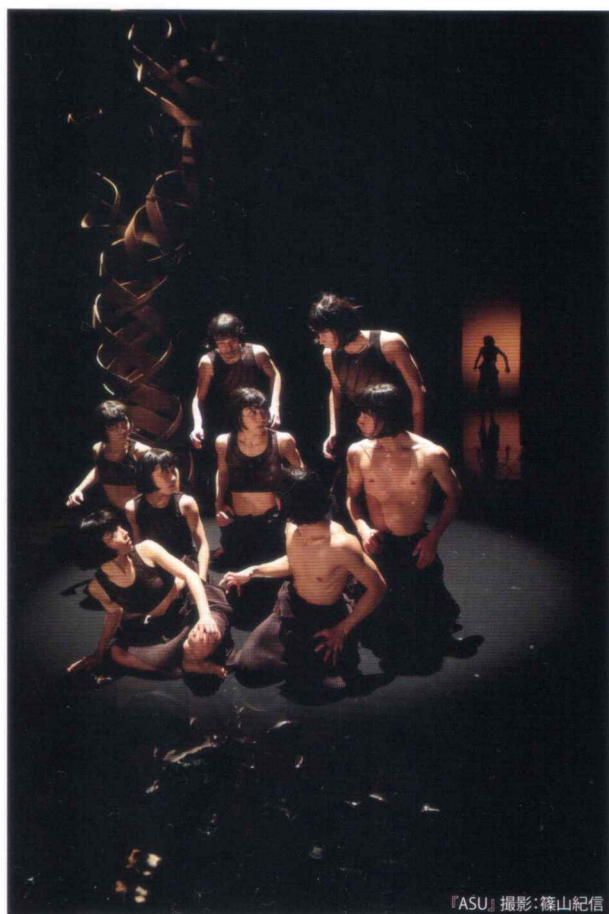
『Training Piece』撮影：篠山紀信

脱構築と再構成の「ウロボロス」～Noism1『ASU～不可視への献身』～

次回作のタイトルが『かかし王子』(仮)から『箱入り娘』へと変更され、そのクリエーションが始まったと伝えられる頃になってさえ、『ASU』については何も書かないままで、構想を練っていたと言えはば大層聞かえは良いのだが、その実、時間は無為に過ぎていつていた。

観た直後には、まず第2部の印象が肥大化して、それに引き摺られそうになる自分を発見。第1部が好

きとか、第2部が凄かったとか、安易な二分法に寄りかかりがちな居心地の悪さがあり、なかなか書き出せなかったのだ。家族に呆れられながらも飽くことなくボロット・パイルシェフのCDを聴きながらの入浴を続けてきた(続けている)ので、幸い、自分の裡に宿った『ASU』は明確な輪郭を保ったままだ。しかし、明るく平面的で一人ひとりの身体に向かう形式主義的な第1部と暗く不分明で人間存在そのものや民族を前作『カルメン』とは異なる語り口で語ってみせる表現主義的な第2部。この一見対称的な二部構成の舞台をどう捉えたら良いのか。なかなか着手出来なかったのはじっくりくる切り口を見つけるまでに時間を要したからだ。今に至り、この二部構成の舞台を等価にみる見方に落ち着いたたので、そのあたりを書いてみたい。



『ASU』撮影：篠山紀信

第1部「Training Piece」。ここでの金森穰は西洋発祥のバレエの脱構築(デコンストラクション)を試みる。そこでバレエは、一切の陰影を取り払おうとでもいうかのように目映い照明の下、正確な方眼が描かれた白い畳上で理知的に腑分けされ、床と斜めという方向を見出す。それはバレエ本来の垂直を志向する舞踊語彙とそれを逸脱する如何にもNoismらしい舞踊語彙のせめぎ合い。しかしそれだけではない。足許の方眼の舞台が一貫して白く区切られた空間として浮き上がるかのように強く自己主張しているため、11人で踊られているというのに、なにかひとつの身体内の細胞の動きでも見つめているかのような印象を受ける。白く照らされた手術台のうえの細胞。それはバレエそのものの。その近代的な意識の産物を脱構築する営み。であるから、ここでの音楽も当然ポストモダンでなければならない。スティーヴ・ライヒとRyoji Ikedaであるのも必然。そして途中、角田レオナルドに振り付けられたコミカルな振付もポストモ

ダンの手捌きが「脱臼」の比喻で語られることが多い事実と極めて自然に通じ合う。と同時に、バレエを身に纏い、それを脱ごうとするNoismの根幹にある「秘儀」を覗き見するかのような禁断の振る舞いには、それに耽る楽しみに格別なものがある。

第2部「ASU」。明晰な西洋の近代を通過したあとの解体構築に対して、第2部はアジアの有史以前の未だ暗い時空で展開される謂わば民族の叙事詩。重ねられる音楽はアルタイのカイ。和楽器に似たその音の連なりは、恐らく、西洋楽器による音楽とは異なり、左脳で把握されるものではないだろうか。用いられる舞踊語彙も、浅学非才の私が足を運んだ4回の公演で目を凝らして見た限りでは、第1部で用いられたものはことごとく封印されていた。その点で、この第2部は感情や情緒に重きを置く情動的な創作ではあり得ず、極めて理知的な選択に基づく創作と言える。体を叩く仕草での「自我」の発見、巨木へのフェティシズム(呪物崇拜・物神崇拜)、見えないものの・まだ来ぬものへの怯え、他我認識、生け贄と輪廻や継承等々、始原において、人を人たらしめる象徴的な契機の列挙を可能にする知性の確かな裏打ちに驚く。アジアを舞台にしながらも、郷愁を感じるどころか、どこか遠い場所という感覚を伴って見つめることになるのは、時間や空間の隔たりという以上に、本質的に「不可視」であるはずの始原が理知的に再構成されて提示されるのを目の当たりにすることによるものであろう。金森穰の深い考察と学究肌の態度の上に構築される舞踊はここでも左脳の発動を求め、私たちをして人という生き物への思索へと向かわせるのである。その醍醐味たるや言うには及ぶまい。

第1部の「脱構築」と第2部の「再構成」。それは合わせ鏡のように逆向きで静的な「一対」ではなく、あたかも「ウロボロスの輪」が如き始まりも終わりもない動的で永続的な「円運動」そのものの。「脱構築」と「再構成」が描く円環のダイナミズム。それはまた、そのまま死と再生とも、破壊と創造とも呼べる、よき芸術が持つ不滅の生命の謂に他ならない。してみると、第1部から第2部を経て、また第1部へと向かわんがため、新潟で全3公演、横浜で1公演の合わせて4回も観なければ収まらなかった気持ちも今なら説明が付こうというものだ。それでもなお、「4回も観た」というよりは、全5回公演を「コンプ」しなかった後悔の方が強いくらいなのであるから。

下村 伸(会員番号373)

『明日～そこに行けば必ず観ることができるもの』

第1部の前半、白い衣裳、床、静けさ、時計の針のような動き、音。そして後半の色彩、ノイズ、バレエ...

今まで観てきたNoism作品の記憶の全てが蘇ってきて、観ながら自分の身体もその動きを真似した

くてたまらなかった。11回目への螺旋階段を上るような作品。

第2部『ASU』は根源にまで遡り、野性や神秘の現出が、遠い原初の記憶を呼び起こす。覚醒。内なるものが湧き立つ感覚がした。

好きなダンサーが退団していなくなる度にショックを受けてきたが、また新しいダンサーが入り、スポットを浴びたその姿は輝かしく、魅きつけられる何かが必ずある。

そしてNoismの舞台に立ち続け、磨かれていく井関さんを観られることが楽しみでもある。

毎公演、何とも言えない感覚、恍惚があつて、金森さんの挑戦、クリエイティビティからは、私もやりたい、創りたい、と常に刺激を受けてきた。

いろいろな舞台がたくさんあるが、Noismだけはこれからも観続けていきたいと思っている。

北口哲也(会員番号313)

「Aoyama Ballet Festival—Last Show—」より『Under the marron tree』撮影：瀬戸秀美



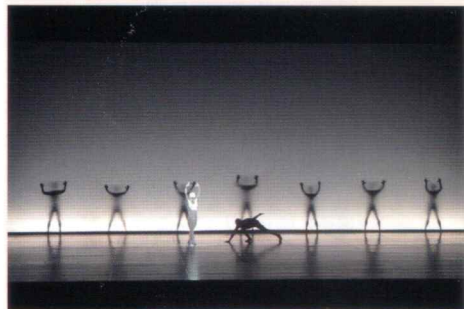
Aoyama Ballet Festival —Last Show—

2015年1月29日・30日
青山劇場

『Under the marron tree』

演出振付：金森 穰
出演：井関佐和子

「NHKバレエの饗宴2015」よりNoism1『supernova』撮影：瀬戸秀美



NHKバレエの饗宴2015

2015年3月28日

NHKホール

出演：Noism1

『supernova』

演出振付：金森 穰

衣裳：宮前義之 (ISSEY MIYAKE)

音楽：黛 敏郎「G線上のアリア」

指揮：園田隆一郎

ヴァイオリン：渡辺玲子

演奏：東京フィルハーモニー交響楽団